

# 言語環境に関する文献研究

豊かさについての観点から

濱本 由加里

(放送大学 学生)

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成15年5月22日受理)

## The literature investigation on language environment

Yukari HAMAMOTO and Kimiyo SATOU

### (研究の背景と目的)

誕生してから言葉を自分のものにしていく発達過程において、子どもそれぞれの言語環境のあり様は、質的に一様ではない。筆者(濱本、以下同様)は、身近に接したコミュニケーション・スキルに差のある2人の女兒AとBの言語環境の違いに関心をもち、5～6年をかけて機会あるごとに観察をしてきた。そこからうかがえる言語環境は、以下のように異なっていた。

A児のコミュニケーションのスタイルは、能動的で、大人からの働きかけに依存することがない。発話も自分の体験や感想、考えていることなどを表現力豊かに語ることができる。これに対しB児の発話は、簡単で短い傾向にある。大人とのコミュニケーションも受動的で、言葉による働きかけにも発話は少なく、首を左右にふったりうなづくことが多い。

A, B児とも、家庭環境において父親が教育関係者で、兄弟もともに兄をもち末っ子である。A児の母親は専業主婦であるが、毎日夕方になるとA児と一緒に犬の散歩をし、静かでなごやかな会話をする親子の様子から、ゆとりのある言語環境がうかがえる。一方のB児の母親も専業主婦であるが、外交上の発話はいつも笑顔で円満な様子の反面、家庭のなかの会話が戸外に大きく聞こえてくるのが頻繁にある。激しく感情的な大きな声と、詰問口調の多いその時の様子などから、母親主導の日常会話が推察できる。

これらのことから、両者の家庭環境には条件的に接点が多く、しかし質的に異なった言語的コミュニケーションのスタイルがうかがえるのである。A, B児のコミュニケーション・スキルの差は、家庭における養育者の言語的働きかけの違いによるものだろうか。そして、このような言語環境の違いは、子どもの発達過程においてどのような特徴と結びついているのだろうか

か。

これらの疑問は、子どもにとっての言語環境とは何か、言語環境の豊かさとは何かという問題を提起している。そして、その背景には言語が思考を規定しているのか否かの、古いが今も生き続けている新しい問題がある。本研究では、これらの疑問について、発達の先行研究などから幅広く資料を収集し、その内容を文献調査する。

## （文献調査による考察）

### 1．バーンステイン仮説（精密コードと限定コード）

バーンステイン（1981）によると、中産階級の子どもたちは、2つのコードを状況に応じて使い分けると予想している。それに対して、低労働者階級のなかで社会化された子どもたちは、限定コードだけに制約されてしまうというのである。下層階級における母親の養育の特徴は、衝動的で権威的であり、論理的な思考や推理を抑制する限定コードを多く用いるとしている。

またバーンステイン（1981）は、日常会話を通じて引継がれるものとして、意味や話し言葉の基礎的ルール他に、社会構造を挙げている。つまり、意識にのぼらなくても家庭での日常会話というプロセスを通して、社会の階層構造も同時に身につけていくというものである。

筆者の観察したB児の場合、母親は権威主義的な限定コードを多く用いた子育ての仕方をしているように思われる。しかし一方で、子ども自身の性格の問題がある。同じ養育者の言葉を受けとっているにもかかわらず、個人により能力の発達に差があることは十分考えられるからである。この意味においての女兒2人の行動は、ともに外向的でスポーツ好きである。性格的には、とくにA児は明朗であって、B児も暗いというイメージではないが、会話が成立しにくいということから受けとれる内向性があるように感じられる。

問題は、B児が家庭内の言語環境を要因として、論理的表現などができずにいるのか否かである。もしそうだとすれば、子どもの論理的抽象的な能力の発達に、母親の言語的働きかけなどの環境条件の影響は大きいと考えられる。またそれは、バーンステイン仮説の限定コードにも対応しているといえるだろう。

### 2．仮説に異議を唱える研究

2つのコード理論においては、社会階層的な背景の重要性が強調されている。そのために、バーンステインの主張するところと違う方向で極端な見解に導かれ、それが広く受け入れられていったという経緯がある。

バーンステイン（1981）の著書の中でラボフ（1970）は、

バーンステインの見解には労働者階級の行動のすべての形態に対し強い歪みがしみこんでいるので、その結果中産階級の言語があらゆる点で優れ、抽象的で必ずといってよい位柔軟性があり、詳細で微妙なものとしてみられている。

と述べている。つまり、バーンステインは暗示的に社会階層差を強化してしまったために批判を受けたものと考えられる。

このラボフの見解について、心理言語学者ピンカー（1995）は、著書の中でラボフ説を強力

に支持している。それには、ラボフがハーレムの街頭で実施した面談の記録が紹介され、「黒人日常英語 (BEV)」と呼ばれる方言のきまりに従っていると判断できることを述べている。

またピンカー (1995) は、黒人日常英語の発話に言葉を省略する傾向があるということについても、文法概念を十分使いこなしていることを具体例をあげ実証している。さらに、ラボフがさまざまな社会環境において聞かれる発話を録音し、以下のような示唆に富む結果を得たことについても評価している。

- ① 普段の日常会話に、文法にかなう発話がとくに多数を占めている。
- ② 文法にかなう文の占める割合は、中流階級の発話よりも労働者階級の方が高かった。

ピンカー (1995) は、これら一連の問題は、1960年代にアメリカで実施された、各種の心理テストから導かれた結論だと論じている。

また、ギンズバーグ (1972) の研究において、下層階級の子どもたちの言語使用について白井 (1992) は、以下のようにまとめて述べている。

- ① 彼らの言語は、他と比べて劣るものではない。
- ② 豊富な語彙の使用と、状況により構造的にも複雑な文を話す。
- ③ 彼らの言語使用や認知的な能力が劣っていたと判断したのは、中流階級の価値観にもとづく測度による一種の人為的な結果である。

バーンステイン (1981) によれば、2つのコードは、チョムスキー的思考方でいえば言語運用に関連しているとしている。「語彙や法 (lexes) によって定義されているのではないということに注意してほしい」と述べている。また限定コードについても、他とは違う価値においての美德として認識することが重要であるとして、価値的な位置づけを低くしないように促している。

しかし、このように述べられているにもかかわらず、この仮説においては極端な見解に導かれ、同様の疑問が提起されたのはなぜだろうか。筆者はこのことについて、コード理論が発表された時代の社会的背景の要因が大きいと考える。

バーンステインのコードの定義は、時代的には1960年代初めである。貧困から起こる知的発達の改善策として、1965年の夏からアメリカではヘッドスタート計画が実施されている。貧しい人々の中には、多くの黒人が含まれていた時代である。貧しい下層階級の言葉ということが、黒人の言葉づかいの不完全さ、不十分な意味に直接結びついてしまったのではないだろうか。その時代が有する社会的背景から、時代時代の特徴的な考え方の枠組みに、コード理論の階層的重要性の強調部分が規定されてしまったと考えられるのである。

そして、およそ40年たった現在では、地球的規模で共生の時代であり、異文化共生が叫ばれている。子どもの発達の方向を示す価値基準や、発達に影響を及ぼす諸条件なども時代とともに大きく変化してきている。かつて発達の心理的側面としては望ましくなかった夫婦共働き家庭や、少子化によるひとりっ子問題、離婚家庭などの比率が増えてきている。

これらのことから、コード理論が定義する意味の解釈については、時代の変化にそった認識をもち考察することが当然必要であろうと考えられる。また、社会階層の構造や言語文化の異なることが予想される国や日本においても、コード理論の特徴があてはまるか否かが問題であろう。

### 3．仮説を支持する研究

バーンステインは、子どもの認知発達を家庭内での社会化のプロセスでとらえ、体系として組立てた。そのバーンステイン仮説を理論的背景として、ヘス&東らが行った大規模な日米比較研究がある。

ヘス&東らは、「母親の態度・行動と子どもの知的発達」(1981)において、養育者である母親の意見や態度など何らかの行動が仲立ちとなって、子どもの知的発達に影響を及ぼしているのではないかと提起している。そしてさまざまな角度から環境と知的発達の関係、また文化的差異においても具体的に分析検討している。

結果をまとめると、日米に共通している子どもの知的発達に関係する母親特性を次のように述べている。

- ①環境内の言語的刺激や母親のコミュニケーション・スタイルにおける表現の豊富さ・多様性などの言語的要因
- ②子どもに対する受容的態度や配慮

このことについて、ヘス&東(1981)らは、これまで子どものパーソナリティの形成や適応の上で基本的に重視されてきたことが、知的発達においても重要な基礎的条件であることを示唆するものとして注目している。

また、日米において高階層の母親に類似した特徴として、次の3つの点を挙げている。

- ①子どもへの否定的傾向が少ない
- ②母親ペースの教えこみが少ない
- ③子どもの自発性・能動性を重視する教授スタイルをとる。

このことから、母親の高い知的水準が日米ともに子どもに対する態度や行動を養い、教育観を育てていることが示唆されたとしている。

ヘス&東(1981)らの研究結果より、相互交渉的なコミュニケーションにおいて、次の2つの環境要素が重要であると推察する。

- ①養育者の豊かな言語表現や多様性などの言語的環境
- ②子どもに対する温かい配慮や受容などの心理的環境

子どもの知的発達という視点から分析検討したこれらの結果は、子どもの発達全般における基礎的な条件の重要性を再確認する研究結果でもある。子どもの知的発達になにが有意味に働くのか、という問いの答えはひとつではないはずである。それは、子どもの発達において環境を考えると、なにが望ましいのかという価値観の表現が多様であるのと等しい。

さらにヘス&東(1981)らは、研究結果から示唆されるバーンステイン仮説に関する結果のまとめとして、以下の2点を述べている。

- ①母親の態度・行動などの特性と、子どもの知的発達はかなり深く関係している。
- ②日米を通じて、知的発達の個人差の分散の4分の1くらいまでは母親要因に関係づけられる。

ヘス&東(1981)らの研究結果は、バーンステイン(1981)の提言にかなり対応するもので

あるといえよう。しかし、現在の家族形態のなかで子どもの発達を考えると、急激な時代の変化を考慮に入れる必要があるだろう。これまで歴史的にも長い間、「母子の2者関係モデルの偏重」(臼井 1995)が支配的であった時代的背景を考慮し、考察することが現在においては必要である。これは筆者が先にも述べた通り、2つのコード理論についても同様であろうと考える。

#### 4. 言語と文化・思考について

岡本(1985)は、バーンステインの研究結果について、時代の推移とともに文化的・社会的状況の変化を考慮に入れ判断することを提起している。また、言語様式が思考に影響するという点についても、2つのコードの違いが直接影響している部分と、2つのコードに具体化された言語文化の違いによる影響とが考えられるとしている。そして階層差による言語様式の区分については、社会階層や職業、学歴などの指標を規準にするだけでは取り計れないものがあることを述べている。さらに、バーンステインの提言における中流階級のコード使用について、精密・限定両コードの「二重的使用性」に特色を見るべきだと論じており、この点は筆者も同様に考える。

岡本(1985)の述べている「言語文化の違い」を考慮すると、広く人類全般の言語環境とは2つのコード理論が示す形式だけに限られるだろうか。精緻化された会話様式か、限定的な会話様式かの直接的な環境からの影響だけを考えたのでよいのだろうかという疑問が生じる。それは、異なる文化圏においては言語に関するさまざまな相違だけでなく、教育水準や経済状況など、文化的・社会的相違が広く随伴してくるからである。少なくとも経済的側面からは、発展途上国と先進国の教育水準が等しいとは考えにくいだろう。

D.マツモト(2001)は著書の中で、キム(M. Kim, 1996)らの研究結果を次のように報告している。

文化が自己像に影響をおよぼし、それはまた同様に会話を制約するものに影響を与える。

このことは、言語使用とその機能も含めて、文化が影響を及ぼすという事実が言語の語彙に限らないことを示唆するものであるとしている。

さらに、D.マツモト(2001)は思考に関して、「2言語併用者の思考、感情、態度がどちらの言語に依存しているか」という点についても述べている。それによると、考えや感じ方や行動など、使っている言語によって変化することを多くの2言語併用者が報告しているとしている。しかし、それは言語を文化的側面から学ぶことの思考の変化であり、言語そのものの影響ではないとしながら、言語がもたらす変化について次のように論じている。

言語は、直接的もしくは文化価値を通し間接的に、その言語を使用する者の概念行動様式に確実に変化をもたらすのである。

発達過程にある子どもにとって、バーンステインの2つのコード理論は、主に家庭から出力される直接的な言語環境である。人間の発達には家庭だけにとどまるものではなく、社会文化的に広く長く生涯にわたるものである。

小嶋(2001)は、文化が環境的側面から人間の発達にかかわっていることを述べている。そ

して、

人間は、自分がもつ内的枠組みにあわせて環境を選択的に取り入れたり、環境がもつ意味を変容する。

と論じている。

この「環境がもつ意味を変容する」からこそ、人間には時間軸での精神的な成長、発達があるのである。子ども時代の養育環境が、限定コードの示唆するような会話様式に制約され、直接的影響を受けたとしても、自ら「内的枠組み」に違うコードを選択的に取り入れる自由度は残されている。限定コードの示唆する会話様式だけに制約されて育った子どもたちのすべてが、同じ発達コースをたどり、将来そろって論理的抽象的な能力の発達の遅れを招くとは考えにくい。そして、その遅れを招くことを危惧することこそが、藤永・柏木（1999）の述べる欧米など多くの文化のなかの、抽象は「高次なものとして尊重される」ことに他ならない。

藤永・柏木（1999）は、現実の具体物を重要視し、概括・抽象という仕方でものごとを認識することを拒否する、個物主義の文化としてアラブを紹介している。まとめると以下の通りである。

- ①個物主義は、アラビア語の言語と密接に関連し対応している。
- ②アラビア語の特徴とアラブ的思考様式とは、個物の重視・概括の拒否という点でみごとに対応しており、相互に規定し合い強め合っている。
- ③アラブ的思考様式を考えると、抽象は高次なものと断定することは文化的バイアスがある。

これらのことは、思考と言語が相互作用的にその言語習慣によって規定され、強化しあっていることをも示唆している。

人間のもつ言語は多様である。その異なる言語のひとつひとつの背景に、文化の多様性の影響を考えざるえない。ある文化圏の視点での1つの見解も、異なる文化圏においては違った見解であるかもしれないのである。

このような観点から、バーンステインの2つのコード理論を考えると、階層差などの社会的要因だけを指標として解釈することは、幅のせまい偏った見解を導きかねない。その時代時代の特徴的な考え方の枠組みによっても、また異文化間の文化的価値観の違いによっても、解釈はそれぞれに異なって当然だと考えられるからである。とすれば、2つのコード理論が示す言語習慣と思考との関係は、異文化の相違を超えられないのだろうか。

永野（1999）は、言語を思考から独立した体系とみないで、もともと人間の認知と関わりをもつという見方をする認知言語学の考え方を述べている。

言語と思考という二つのものが関係があるのではなくて、もともとひとつながりの過程なのである。言語だけを単独にとり出してその教育をみっちりとおこなえば、その結果として思考力が育つはずだ、というような見方をするのがもともと無理なのだということが、次第にわかってきた。

これは岡本（1985）の述べている、精密コードの言語環境が、対話を深めることとして大切であるという見解に対応するものと筆者は考える。岡本（1985）は、対話を深めるという点を

無視して、形式的に精密コードを早期から子どもに強要するかたちで教育してゆけばよい、という考え方に注意を促している。子どもの言葉の発達には、早期からの能力開発などにおける幼児教育によるのではなく、日常生活を基盤として、生活をしていくなかで確かな根をおろしていくものと考えられる。そして、それは同時に言葉とひとつつながりの思考力を育てているということでもあろう。

## 5. 大人の役割について

対話が充実することは、その基盤を堅固たるものにし、そこから新たな言語生活が広がっていくことである。その際、子どもの言語発達をそばで見守り、導いていく大人の役割は重要であろうと考える。

野呂（1994）は、言語的コミュニケーションに必要な能力の発達には、大人の指導的役割が大きいことを述べている。しかし、家庭を中心に幼稚園や学校、地域社会などでの大人との関わりは、円滑に機能する場合ばかりではない。今、世界中で問題となっているさまざまな形で児童虐待は、指導的役割にある大人が加害者となっているのである。

D.ペルザーの著書「“It”と呼ばれた子」は、虐待された著者自身の告白をつづったものである。それは、苛酷な「身体的虐待」と「保護の怠慢ないし拒否」（山崎 1995）が主であった。しかし、著書のタイトルにもなっている“It”という言葉で母親から呼ばれた時の、言葉の暴力に対する著者自身の心理的外傷ははかりしれない。

“It”の言葉が発せられたときの母親の会話と、自身の気持ちを次のように述べている。

これだけはしっかり頭にたたきこんでおきなさい、このばか野郎！おまえが何をやって、あたしによく思われることなんかないの！わかった？おまえなんかどうだっていい！おまえなんて“It”よ！いないのといっしょよ！うちの子じゃないよ！死ねばいいのよ！死ね！聞こえたか？死んじまえ！

そしてペルザー（2002）は、

今までだって、同じようなことは何度もくり返し言われてきたけれど、今回の“It”という言葉ほど残酷な言葉はなかった。ぼくは“It”なのだ。人間以下なのだ。

このペルザーのように、言葉による虐待などで乱暴な言葉を日常集中的に子どもが受けとっている場合、子どもの心にその言葉はどのように反映されるのだろうか。

ペルザー（2002）は、子どもの目から見た虐待について次のように述べている。

毎日毎日、一瞬一瞬をうんざりして過ごした。ぼくには、“希望”とか“信仰”なんて言葉は文字だけのことで、でたらめに寄せ集めた意味のないものだとわかった。

人と人が対人関係を結ぶためには、言語や非言語的なコミュニケーション手段は必要不可欠である。人間が社会生活を営むための言語能力の発達には、いろいろな意味での対人的、社会的環境条件が重要であろうと考えられる。

子どもが誕生してから成長発達を見守る家庭環境には、生涯にわたる人との関係性という側面での重要な役割がある。子どもにとって、初めて出会う対人的環境が家庭なのである。このように考えていくと、子どもが言語を獲得し、発達させてゆくことのできる原動力の源は、誕

生後の日常生活のなかにあると考えられるのである。そして外的環境である家庭は、子どもの言語発達にとって不可欠な必要条件であり、本質的な役割を果たしていると考えざるえないだろう。

## 6. コネクショニスト・アプローチ

A. K. スミス (1998) は、「構造化された表象は、発達の結果として創発しうる」と論じている。今井は「心の生得性」(2000)の中で、人間の知性に関する新しい視点として、認知科学における最近のコネクショニストの枠組みを紹介している。それは、エルマン (J. L. Elman, 1996) らによる「生得的な知識を想定せずに『学習』することが可能である」という新しい主張の展開である。

A. K. スミス (1998) は、そのコネクショニストの立場から言語獲得に関して次のように主張している。

最初の大域的な表象には暗黙的な形でしか含まれていなかった知識を表象しなおし (re-represent), 明示的なものに変えていく。

つまり、「内的表象の新たな柔軟性」が子どもに備わってこそ、言語体系をより高次に複雑なものにつくっていくことができるというのである。

同様にコネクショニストの立場から、ジョンソン、オリバー、シュラガー (1998) は、脳内表象の発生について「制約付きの可塑性」を提唱している。それは、発達における素質と環境の相互作用による影響について、現実の新皮質における表象を、コンピュータシミュレーションを使って対応させるアプローチである。

それによると、

皮質板上の表象は競合 - 協働と漸進的 - 退行的過程による自己組織化の過程を通して発達するものだと考えられ、内的要因、外的要因、またダイナミックな要因によって影響を受けるものである。

と論じられている。

これら2つのコネクショニストの視点は、現時点での科学の可能性から導びきだされた、外的環境からの入力刺激の重要性を、新たに脳の皮質の表象によって具体的に実証しようとするものであろう。これら2つの視点における筆者の解釈は、以下に示す通りである。

人間は、本来もつ素質的要因に、外界からの環境入力の刺激を組合わせて相互作用的に発達する。反対にいえば、自分自身によってその刺激をプラスに inputs するか否か、または「新皮質の制約」とするか否かによっては、新たな自己の発達の可能性に結びつけることができるということでもある。脳内における環境システムを発達初期に整え、変化に柔軟に対応できるような過程を援助することこそが重要であらう。

これらを言語獲得や言語環境において考えた場合、ジョンソン (1998) らが述べているように、「幼い時期に新皮質に有効な表象を形成する」うえにおいても、言語環境の質的要素は重要であるという解釈もできよう。そして外界の自己の発達に合わせて、脳内における「表象変化」を柔軟にすれば、言語体系をより高次に複雑なものにつくっていくことができるのであろう。この場合も、個人の素質に外的要因としての環境条件と、「ダイナミックな要因」が空間

的に作用し、さまざまな組み合わせにより個人差が鮮明になっていくものと考えられる。

それにはまず、環境における言語的な刺激情報を意識する、ということが「表象変化」を柔軟にすることにつながるものとする。個人の自己意識が、言語活動を介して組織化され、その過程において「皮質板上の表象」も発達するのだろうと考えられるからである。

## 7. 心理言語学的アプローチ

D.マクニール(1990)は、

われわれ人間は、社会的な経験を心的にシミュレートすることによって、言語的に意識的になるのである。

そして、言語活動が自己意識を創り、自己意識の源となることを述べている。さらに、

考えるということと、ことばを話すということは、1つの連続体上に横たわっている。

ことを論じている。このことは、コミュニケーション言語と思考の道具としての言語が、マクニール(1990)の述べる「深層時間」のなかに、連続して存在することを示唆している。その「深層時間」とは、「文が内的に発達(development)するための時間」であり、「深層時間」においては「思考が、継続して変形を受けることになる」と述べられている。そして「深層時間」は、文を発達させるために必要であり、個人の「内在的価値の出現」に重要であるとしている。

人間は考える時、言葉を使って考えているし、また話す時には考えていることを言葉にして伝えているはずである。このように思考と言語の関係は、一方が一方に影響を与えるという関係ではなく、マクニール(1990)が述べているように「1つの連続体上に横たわっている」と筆者も同様に考えている。

また、発達の時間軸において、人間が思考を変化させていくことについても、マクニール(1990)は「1つのタイプの思考から他のタイプの思考へと移行していく変形が、存在する」ことを述べている。そしてその変形とは、「話をするという外向きの方向と、話を理解するという内向きの方向」の両方向で生じるとされている。

とすれば、外界からの言語刺激が存在する環境におかれることが不可欠である子どもの思考は、「継続して変形を受ける」ことになる。このことは、子ども自身が社会的経験としての言語刺激を入力し「心的にシミュレートする」ことによって、思考を負の方向に変形させていく時間問題であるということでもある。この意味において、言語環境の質的違いの影響は大きいと考えられるのである。

## 8. 生活とことばについて

大久保(1981)は、ことばの習得に「おとなのことばに対する意識」が大きく影響することを述べている。この「おとなのことばに対する意識」というのが、筆者は言語環境の質的部分であろうと考える。日常生活の中で、交わしあう言葉の良し悪しによって培っていくのが精神生活だとすると、言語環境の質的重要性はかなり大きいといえるのではないだろうか。子どもは、コミュニケーションの技術的側面での発達過程にあるのだから、対人関係の基礎を学ぶという意味においての家庭の役割、養育者との対話はとても重要である。

人間が話をしたり、理解したりすることのいずれもが、生活をしていくなかでの日常会話と密接に結びついている。このことは、子どもが言葉を獲得し発達させていく時に、不可欠な要因が日常の経験であるということに他ならない。

内田（1998）は、

ことば生活の文脈に埋め込まれ、生活経験と結びついてはじめて意味をもったことばとして使いこなせるようになるのである。

と述べている。日常生活が虐待の連続で、希望という言葉が無意味なものと受けとった、ペルザーの生活経験は劣悪であった。

豊かな言語環境は、生き生きとした日常生活から生まれるものだとは筆者は考える。言語環境の基盤は、子どもに関わる周辺の大人たちが意識して言葉を選び、日常における会話のやりとりを行っているかにあると考える。しかし、それは形式的な教育としてあるのではなく、生活とともに育むというような生きた言葉で成り立っていることが重要であろう。たとえば、朝起きたら家族が言葉であいさつをするのとしめないのとでは、言語環境としての違いは大きいと考えられるのである。

### （豊かな言語環境についてのまとめ）

人間は、相手に向かって発話する話し言葉の他に、内面に向かって自己と対話をすることができる。この内言が、思考や認識を深める働きをするとヴィゴツキーが提唱しているように、時間軸にそって変化するさまざまな要因を包括的に統合し、新たな自己を導く役割を果たすものとする。

そして、新たな自己が幾度も内省をくり返し、内に向かって精神活動をしていく過程において、マクニール（1990）が述べている「文の発達」が存在するのだろうと考える。このように、人間は最終的には自らを抛りどころにして思考を深め、言葉を熟成させるのである。筆者は、豊かな言語環境は「おとなのことばに対する意識」が不可欠であろうと考えるが、最終的に意識が自己に還っていく力を育てることだと考える。

それは、ペルザーの事例にも見られるように、発達過程において劣悪な言語環境にあったとしても、自らの意識に依拠し、自己の「内在的価値」を知ることによって、新しい自己を育て発達させることが可能であるということである。そして、それが言葉のもつ本質的な力であろうと考える。

では、豊かな言語環境を考えると、具体的にどのようなことを重視して育まれるのが望ましいのだろうか。大久保（1981）も述べているように、日常生活において文章ことばの世界に触れる機会を習慣的にもつことや、会話をするときの話題を豊富にする工夫は基本的に大切であろう。それらのことは、生活の場を共有しているという安心感に加え、子どもの関心や、興味あることに関連させた対話として進むならば、子どもは積極的に自己表現できるものである。そうした子どもの内的世界までを、周囲の大人が心と耳を傾けて理解しようとするならば、生活の場を真に共有していることにもなるのである。

家族のかたちやあり方が多様な現代にあっても、言葉のやりとりの豊かさに時代遅れはないのではないだろうか。力関係において弱い子どもは強い大人に、圧力が内包された言葉で日常

養育されれば、心理的に余裕がなくなることに今も変わりはないだろう。言葉は、相手の心に届かなければ生きて響かないのである。それなら、心に届く言葉とはどのような言葉だろうか。

筆者は、非言語的なものも含め、子どもの心に寄りそう姿勢から自然に発話された言葉は、たとえ叱る言葉であっても子どもの心に生きて響くものとする。生きた言葉をやりとりするなかで生活をしていると、好循環が生まれ発達も促進されるのではないだろうか。そして結果的には、子ども自らの生き生きとした言葉を使って想像力、独創性を養い、自己を見つめる過程にたどりつくのだと考える。

筆者の結論として、言語環境の豊かさについてのイメージを次の7つのキーワードにまとめた。

1. 「受容・配慮」
2. 「対話を深める」
3. 「おとなのことばに対する意識」
4. 「内在的価値」
5. 「環境がもつ意味を変容する」
6. 「言語的に意識的になる」
7. 「内的表象の新たな柔軟性」

これらのイメージをつなげていくと、人間が生きるということの豊かさそのものである。人間は、温かく受け容れられてこそ相互交渉的な対話を充実させ、深めることができるのである。そこには、大人たちの言葉に対する意識が高く存在する。子どもは自分の内に存在価値を見出し、いかなる環境にあるときも、個人の「内的枠組み」にあわせて環境のもつ意味を自ら変え受け入れていく。その原動力は生活のなかにある言葉であり、内に向かって自ら意識的に使っていくとき、個人は新しい自己に出会うのだと考える。

人間にとって、誕生から豊かな対話をもてるようになるまでの、年令発達に促した言語環境の質的重要性は明らかである。筆者は、先にも述べたように、意識が自己に還っていく力を育てる環境こそ、豊かな対話も育てるものとする。そのために、自身の経験から日記を書くことを提案する。毎日くり返してつづいていく記録の過程に、気づきや新しい発見が思いがけなく見つかるからである。それは、意識をせず「言語的に意識的になる」瞬間である。そして、またそれは言語と思考が「1つの連続体上に横たわっている」瞬間に出会うことでもある。

## 引用文献

- 1) 東洋, 柏木恵子, R. D. Hess (1981)「母親の態度・行動と子どもの知的発達 - 日米比較研究 -」 東京大学出版会 75, 173 - 176, 181 - 182, 194 - 197, 301 - 316頁
- 2) Annette Karmiloff-Smith 吉村由紀・針生悦子(訳)知識の生得性を再考する - 人間の表象変化の理解に発達は何ぞ必須なのか 今井むつみ(編著)(2000)「心の生得性 - 言語・概念獲得に生得的制約は必要か」 共立出版 239 - 240頁
- 3) 今井むつみ『心の生得性』の編集にあたって 今井むつみ(編著)(2000)「心の生得性 - 言語・概念獲得に生得的制約は必要か」 共立出版 vi頁
- 4) 臼井博 家族の中の人間関係 山崎晃資(編著)(1995)「子どもの発達とその障害 - 世界の子どもは、今

- 」 放送大学教育振興会 59頁
- 5) 臼井博 認知的社会化理論 東洋, 繁多進, 田島信元(編著)(1992)「発達心理学ハンドブック」 福村出版 201 - 203頁
- 6) 内田伸子 ことばと人間 内田伸子(編著)(1998)「言語発達心理学」 放送大学教育振興会 24頁
- 7) 大久保愛(1981)「子育ての言語学」 三省堂 69 - 74, 144, 166頁
- 8) 岡本夏木(1985)「ことばと発達」 岩波書店 168 - 171頁
- 9) 小嶋秀夫(2001)「心の育ちと文化」 有斐閣 46頁
- 10) Steven Pinker 椋田直子(訳)(1995)「言語を生みだす本能(上)」 日本放送出版協会 34 - 35, 37 - 38頁
- 11) Dave Pelzer 田栗美奈子(訳)(2002)「“It”(それ)と呼ばれた子 幼年期」 ソニー・マガジズ 173, 213, 225 - 226頁
- 12) David McNeill 鹿取廣人, 重野純, 中越佐智子, 溝渕淳(共訳)(1990)「マクニール心理言語学『ことばと心』への新しいアプローチ」 サイエンス社 1 - 2, 19, 393 - 394頁
- 13) David Matsumoto 南雅彦, 佐藤公代(監訳)(2001)「文化と心理学 - 比較文化心理学入門 - 」 北大路書房 172 - 173, 181 - 182頁
- 14) 永野重史 言語と思考(2) - 言語相対性論 永野重史(1999)「教育の中の言葉」 放送大学教育振興会 52頁
- 15) 野呂正 発達のなかの言語的コミュニケーション 野呂正(編著)(1994)「発達心理学」 放送大学教育振興会 71頁
- 16) Basil Bernstein 萩原元昭(編訳)(1981)「言語社会化論」 明治図書 45 - 46, 156 - 157, 162 - 163, 169 - 170, 178 - 179, 245, 250, 259 - 261, 266頁
- 17) 柏木恵子 言語・認知・思考: 思考を導くことば 藤永保, 柏木恵子(1999)「エッセンシャル心理学 - 30章で学ぶところの世界 - 」 ミネルヴァ書房 68 - 69頁
- 18) Mark H. Johnson, Andrew Oliver, Jeff Shrager 山下博志(訳) 脳の皮質において表象はどのように現れるか 今井つづみ(編著)(2000)「心の生得性 - 言語・概念獲得に生得的制約は必要か」 共立出版 199, 224頁
- 19) 山崎晃資 世界の子どもは, 今(2) 山崎晃資(編著)(1995)「子どもの発達とその障害 - 世界の子どもは, 今 - 」 放送大学教育振興会 31頁

## 参考文献

- 1) Ginsburg, H. 1972 The myth of the deprived child. Prentice-Hall.
- 2) Labov, W. 1970 'The logic of non-standard English', Language and Poverty, Williams, F.(ed.), Markham Press, reprinted in Open University Course Unit.